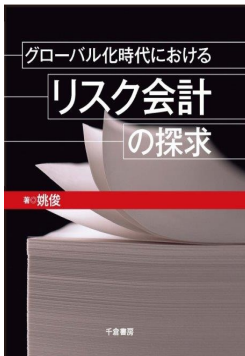


【 書 評 】



『グローバル化時代におけるリスク会計の探求』

姚 俊 著

株式会社千倉書房

平成25年3月27日刊

A5判・定価 本体3,700円 + 税

本書は、リスクの側面から企業会計のあり方を探求する学術書である。リスクに対する社会的要請と期待の高まりに対して、会計的側面から何ができるのかを究明しようと、多くの文献をもとに、多様な視点からの考察がなされている。

本書では「リスク会計」を、「広くリスクに焦点を置き、その認識・測定・開示問題を主たる考察対象とする会計の領域」と定義している。「リスク会計」の目的は、企業の経営と業績に影響するすべてのリスクを認識・測定し、意思決定に有用なリスク情報を意思決定者に提供することにあるとしている。

本書は4部で構成されている。

第1部「リスクの本質とリスク会計のデザイン」では、リスク概念の歴史的発展を整理した上で、リスクの本質を明らかにしようとしている。

第2部「リスクへの対応と保守主義会計の再認識」では、リスクと不確実性に対処するための会計原則として、保守主義会計を取り上げている。保守主義会計の概念を整理し、具体的なシナリオを用いて保守主義の役割を説明している。

第3部「リスク情報の拡充化とその有用性」では、企業特有のリスクの重要性が高まるとともに、非財務情報の提供が必要になると述べている。会計基準においては、市場リスクに関連する情報が要求されるものの、それ以上のリスク情報の提供については大きく推進されてきていない。そのため、非財務情報の重要性が浮き彫りにされてきたと説明している。このような傾向は投資家へのアンケート調査からも示されており、アンケート調査の結果、非財務情報が投資家のリスク判断に役立つことが判明したとしている。

第3部ではまた、「知的負債」の重要性についても説いている。企業が競争で優位に立つためには「知的財産」が重要な要因である一方で、企業価値を毀損する要因として「知的負債」が存在する点に着目している。

第4部「リスク開示の影響要因とあり方」では、リスク開示に関する文献に基づき、各国でリスク開示の量が増大する一方で、リスク情報の質が高まっていないと指摘している。また統合報告におけるリスク開示の実態を調査した上で、質の高い統合報告を任意開示することが、グローバル時代の企業の社会的使命であると提言している。

本書の冒頭に、資本主義で成果を上げるには発明家や起業家がリスクを取ることが不可欠であり、時代とともに新たなリスクが生じる現状が述べられている。資本主義におけるリスクを織り込んだ会計のあり方について、幅広い視点から考察している本書は興味深い。公認会計士のみならず会計に携わる実務家や研究者、投資家にとって、社会における会計の役割について深く考えさせられる著作といえる。本書によって、将来の会計のあり方に関する議論が活発となることが期待される。

以上のことから、協会学術賞に値するものとして選定した。